

## 書評

川越 修著

### 『ベルリン 王都の近代——初期工業化・

一八四八年革命——』

北村 昌史

評書

ドイツ「特有の道」論批判の書である、ブラックボーンとイリ  
ーの『現代歴史叙述の神話』の翻訳（望田幸男訳、晃洋書房）が  
日本で出版されたのは、一九八三年のことであった。それ以降、  
従来の通説的なドイツ史解釈、すなわちドイツではブルジョアジ  
ー層の未成熟からブルジョア革命が実現せず、そのため最終的に  
ファシズム体制の成立という悲劇が生じた、という解釈の再検討  
の必要性が、強く意識されるようになったと思われる。こうした  
再検討の作業には、新たなドイツ近現代史像、ないしは従来のもの  
とはまったく別の歴史観の形成という作業が伴わなければならない  
であろう。そうした作業のためには、近年隆盛をきわめた社  
会史の手法を用いてドイツ社会にアプローチするのも一つの有効  
な手段ではないだろうか。昨年出版された川越修氏の『ベルリン  
王都の近代——初期工業化・一八四八年革命——』は、そうした

社会史からのドイツ近現代史像再構築のための一つの試みである。  
そこで、本書についての論評を以下で試みてみたい。

本書は、一九世紀中葉のベルリンの社会史にかなする川越修氏  
の旧稿を、新稿を加えたうえで、配列しなおしたものである。「は  
じめに」において「本書を、一九八五年一〇月二〇日、余りにも  
早く逝ってしまった学父、良知力教授の墓前に捧げたい」と述べ  
ていることから解るように、著者の学風は、故良知力教授のそ  
れをうけつぎつつ、さらに発展させたものと言えよう。そして、  
本書は、著者の言葉によれば、「一八四八年革命期のベルリンに焦  
点をあて、民衆社会史研究から出発して、近代社会の形成メカニ  
ズムの解明へと進むことにより、〈具体的存在〉の論理を読み解く  
方法としての社会史研究の可能性を探る一つの実験という性格を  
もつ」のである。それでは、まず、本書の内容を概観してみよう。

## 二

「はじめに」において、本書の課題設定と問題意識が述べられ  
る。ドイツ「三月前」期は、伝統社会の枠組みが動揺しながらも、  
その行方の定まらぬ過渡期としての、初期工業化の時代であった。  
一八四〇年代のベルリンは、こうした過渡期の多様な都市民衆の  
るつぼとなっていた。本書は、このベルリンの都市民衆の姿を明  
らかにすることによって、パウベリスムス（大衆貧困状況）とい  
う社会危機の実態をとらえ（第Ⅰ部）、さまざまな社会的対立が  
一挙に噴出した一八四八年革命という「事件」のもつ意味を解説  
し（第Ⅱ部）、ドイツ近代社会形成過程におけるこの革命の意味  
をさぐる（第Ⅲ部）を、その課題としている。こうした課題

の背景には、著者の二つの問題意識が存在する。一つめは、「挫折したブルジョア革命」というドイツ一八四八年革命に関する通説的解釈、さらにはドイツ近代史像の再検討、もう一つの問題意識は社会史研究の方法についてである。後者の問題意識には二つの側面がある。それは、第一に、一体性が解体していた当時の都市民衆の全体像を、都市という一つの生活空間における民衆の相互位置関係により明らかにし、それによって地域社会単位の比較社会史研究のつながりを見つづけること、第二に社会史と政治史・事件史の結合による新たな近代史像の構築である。

では、以上の課題と問題意識にもとづいてどのように一八四八年革命前後のベルリン社会が解明されていくかを、第一部から順をおって見ていこう。

「I 大衆貧困状況下の王都社会」においては、パウベリスムスにみまわれた「三月前」期のベルリンの姿が、人口変動の状況、産業構成、市区ごとの特徴（第一章）、労働諸階級、「市民」、および両者をつなぐ位置にある手工業者の分析によるベルリン都市民衆の階層構造の解明（第二章）、ベルリン民衆の生活、「職人労働者」、および一八四〇年代のベルリンの社会運動の分析による諸社会層の相互位置関係の見取り図の提示（第三章）、そして「プロレタリアート」と「市民社会」の対立を示す都市救貧制度の分析（第四章）によって解明される。

著者は、同時代人の視点をも積極的に取り入れつつ、「三月前」期ベルリンの姿を多面的に分析しており、ここでその分析を逐一要約することは紙幅の都合上困難である。そこで、そうした分析のうち、ここでは、一八四八年革命において顕在化し、第Ⅱ部以

降でも取り上げられる論点をいくつか述べておくにとどめよう。

第一点は、「三月前」期におけるベルリンの都市民衆の一体性の解体である。著者は、社会層としての同一性を喪失し、動揺しはじめた階層である手工業者を例にこうした状況を述べている。

すなわち、ベルリンの手工業には、均質な構造を維持した業種、貧富の両極化が定着した業種、そして両極化が開始しだした業種が存在していた。ほかに、一八四〇年代ベルリンの社会運動相互の結び付きの欠如が、当時の都市社会の一体性の解体を示しているのである。

第二は、都市民衆の一体性の解体から派生的に生じてきた、「職人労働者」という新たな社会層の出現である。本書のキー概念の一つでもあるこの「職人労働者」は、次のような社会層のことを言う。手工業全体の動揺の中、親方への道を絶たれ、親方と対立し、工場を労働の場として受け入れつつ、こうした変化を初めて経験した世代であり、一方手工業者としてのアイデンティティを維持している職人層である。彼らは、一八四八年革命の一つの民衆基盤となった。

第三に、「プロレタリアート」という「市民社会」に対置される都市下層社会の存在である。ベルリンの都市救貧制度の実態が、その対立を示している。すなわち、「プロレタリアート」には、市の救貧制度の助けを借りて窮状をしのぐ可能性がほとんど閉ざされていた。そして、それが彼らに自治体Ⅱ「市民社会」から排除されているという感情を与える契機ともなっていた。この対立は、一八四八年革命に持ち込まれる。

第一部で明らかとなった「三月前」期のベルリン社会は、一八

四八年革命に直面して、どのような姿をとったのであろうか。この問いに答えてくれるのが、「Ⅱ 一八四八年ベルリン革命」である。ここでは、一八四八年革命におけるいくつかの事件の分析によってこの革命の意味を解説しなおすことが課題となる。

第五章「市民層の見た『三月』革命」では、市民層の書いた書簡、回想録、そして日記を通して、「三月」革命（三月十八・十九日のベルリンの騒動）を直接経験した人々が、どのような革命像を持ち、この「革命」の担い手を誰ととらえていたかが明らかにされる。「三月」革命の担い手が「職人労働者」であることが確認された上で、書簡などの分析がおこなわれる。そこで明らかにになった各人の革命像は、安易な図式的解釈や類型化を拒み、各人の革命とのかかわりをもっと個別的な問題として深く掘下げるようせまるものであった。著者はそうした同時代人の叙述をいくつかの点に整理している。ここでは、そのうち、「三月前」期と一八四八年革命との間に連続性をもち、また第六章以降にもつながっていく問題として、「都市市民」層と「居留民（『プロレタリアート』）層の対立がそうした叙述からうかがえるということを指摘しておく。

次の第六章と第七章では、一八四八年革命の具体的な事件が取り上げられ、「三月前」期ベルリンのはらむ問題がどのように顕在化し、どのような帰結をむかえたかが考察の対象となる。

ベルリン都市民衆の多様性を扱ったのが、第六章「労働者層と革命——ストライキ運動分析——」である。ここでは、一八四八年春のいくつかのストライキ運動を取り上げ、労働者層の革命が分析される。こうしたストライキは従来賃上げと労働時間短縮を

求めた「穏当」な運動と一括されてきたのだが、具体的に機械工などの工場労働者、指物工などの職人労働者層、そして印刷工が分析の対象となる。こうしたストライキ運動は、手工業的熟練を持った労働者を主たる担い手とする、「人間として生きる権利」を求めた運動であり、各職種の伝統や労働者のおかれた社会的、経済的状況のちがいが、運動の指導者の思想などのために多様性に富んだものであった。そして、一八四八年春のストライキ運動と労働者の組織化という問題の関連については、多様なストライキ運動を展開した労働者たちが、都市と同職組合という従来の組織的運動の枠を、それぞれのやりかたで越えようとしていた。印刷工は全国組織を結成し個別都市の枠を越えようとし、機械工は同職組合の枠を越えたものの、企業主のバスターナリズムの枠にとりこまれ、職人労働者は都市の枠の中で同職組合の結合をはかった。第九章で取り上げる労働者友愛会は、この職人労働者の歩みにそくしたものであったことが確認され、第三部以降とのつながりが見通される。

次に、「プロレタリアート」と「市民社会」の対立という問題を取り上げたのが、第七章「革命の『挫折』——市民軍をめぐる社会的対立——」である。ここでは、三月革命後に成立した市民軍をとおして、一八四八年革命の「事件史」と「社会史」の架橋の可能性がさぐられる。この市民軍は、市民自らの手による「安寧秩序」の維持を意図したものであり、市民には「革命」の「勝利」を意味していた。その際市民の革命理念を支えた社会理念は、中間勢力を排除し、限定された市民による自治活動を基礎とする「身分的的市民社会」であった。だが、当時のベルリンの状況はこうし

た理念を許すものではなく、それは市民軍をめぐる「市民」と「労働者」の対立として意識された。この対立は、具体的には「人民武装」を要求する下からの動きとして表面化し、これに市民軍の警察化をはかる上からの動きがからんで、一八四八年四月以降の市民軍の活動は展開していく。最終的には、市民軍と公共土木事業労働者の衝突（十月事件）において、市民軍が最初に銃を使用したことにより、「安寧秩序」が乱れ、市民軍の存立基盤（「革命」と「安寧秩序」）が失われてしまう。それから、市民層と労働者層は「あからさまな敵対関係」になり、もはや諸社会層の結合体形成の可能性は失われていた。そうした中で、市民軍は解体し、市民軍にかけたベルリン市民の自治の夢も消えてしまったのである。

一八四八年革命をきっかけとしてベルリン社会がどのように変化しはじめたかを考察するのが、「Ⅲ 一八四八年革命の社会史的意味」である。つまり、一八四八年という切断面を「病氣と健康」という日常生活上の基本問題にそくして解析し、革命を経験することにより自己形成の道につくドイツ近代社会の姿を、ベルリンの王都から首都への転換という観点で、上（第八章）と下（第九章）から照射することが課題となる。

上からの首都社会への転換の道筋をたどるのが、第八章「コレラ・都市・国家」である。この章では、一八三一・三二年と一八四八・四九年のコレラ流行の意味の社会史的な解説が試みられる。まず、ベルリン社会に大きな影響を与えた一八三一・三二年のコレラ流行に対する、ベルリン医師団、自由主義者、プロイセン政府の見方が検討される。ベルリン医師団が、接触伝染説および政

府との一体化、自由主義者がミアズマ説および自由主義的な干渉国家論の萌芽とも言うべき立場、そしてプロイセン政府が予防対策ではミアズマ説、基本的には接触伝染説、そして流行時には国家の強力な介入をそれぞれ目指していた。次に、一八三一・三二年と一八四八年の流行の実態が明らかにされる。このうち一八四八年の流行の時、水と住居を中心とした都市衛生問題の重要性が指摘されていた。住居問題については革命前から自助による「ベルリン共同建築組合」の活動があったが、挫折した。最後に、医師ヴィルヒョーの一八四八年革命時の言説をおして、四八年のコレラ流行をきっかけとしてどのような発想が生じたかがさぐられる。ヴィルヒョーが目指したのは、「人民主権、民主主義国家」の原理に立ち、そうした国家による「至上の最も自然な財産としての身体の保証」を意味する「公衆衛生の原理」であった。それは「上からの救済という視点」を強くもっていた。だが、自助的な都市改革の試みと共に、このヴィルヒョーの考えも消えていく。この二つの試みが再び出会うのが一八五六年以降であると指摘され、エピローグが予告される。

第九章「職人労働者と相互扶助組織問題」では、相互扶助組織をめぐる議論をおして、ベルリンの首都社会への転換の道筋が「下から」さぐられる。まず、こうした議論が自助と国家扶助の間を揺れ動いていたことを指摘したうえで、一八四八年初夏から初秋にかけて行われた手工業者、職人、労働者による会議が分析の対象となる。北ドイツ手工業者・営業者層代表者大会では自助フランクフルト親方会議では、親方の監督のものと自助的相互扶助組織を軸に、国家扶助を組み合わせたもの、フランクフルト職

人会議では国家扶助を前面に出し、親方の監督のもと相互扶助組織を拒否すること、そしてベルリン労働者会議では国家扶助が、それぞれの解決策とされた。これらの会議のうち、革命の波がひいていくなか、大衆的と呼びうる運動を展開できたのは、ベルリン労働者会議において成立した労働者友愛会のみである。この友愛会の運動を支えたのは、職人の相互扶助組織であり、指導部においても革命期の国家扶助から自助への転換が見られた。

「エピソード 首都社会への転換」では、第Ⅲ部で明らかにされたベルリンの首都社会への転換の道筋が実際にどのように結実したかが概観され、一八四八年革命の意義が検討される。つまり、「社会危機の直接的な解決にのりだしたプロイセン国家が、ベルリンの都市近代化事業を積極的に推進するとともに、『医と健康』の領域を一つの突破口に日常生活の制度化に着手し、広汎な住民の合意をとりつつ、市民層の手をはなれたベルリンの国家への再統合（『首都化』）をはかることにより結果的に自らも近代的な社会国家への道をたどりはじめる経緯」が明らかにされる。まず、都市近代化事業は、都市当局による都市改造計画の挫折を前提として、一八四八年にベルリン警視総監に着任したヒンケルダインのもと、国家によって着手される。そこでは、ベルリン警察機構が再編成されたうえで、上水道整備、街路清掃、消防がベルリン警察によって着手され、日常生活に不可欠の事業は警視庁の管轄におかれた。こうしたベルリンの首都社会への転換を不可逆的にするには、職人労働者層を中心とする住民の同意が必要である。相互扶助組織に対する一八五〇年代のプロイセン国家の対応はこの点に向けられていた。すなわち、一八五四年四月三日の

「営業扶助金庫法」では、相互扶助組織への国家の関与が前面に出てきたのである。

「三月前」期にパウペリスムスという危機の時代をむかえた王都ベルリンは、一八四八年には近代国家誕生の舞台に転換することになる。これ以降、近代国家は、ベルリン住民の同意と「社会国家」への統合化希求にささえられつつ、「社会国家」に向けての自己転換の道を歩みだした。「一八四八年革命をはさんだ時期のベルリンから、ドイツにおける近代社会形成への足元をこそ聞きとらねばならない」と、著者は本書の最後をしめくくっている。

### 三

以上のように、本書では、「三月前」期にパウペリスムスという危機をむかえた王都ベルリンの社会構造が、一八四八年の三月革命をきっかけとして、近代的首都社会へと転換した道筋が明らかにされ、それ以降、近代国家が「社会国家」にむけての自己転換の道を歩みはじめたのだと主張された。同時代人の著作、論文、日記、回想録、そして書簡なども含む一次史料に立脚し、当時の人々の自分の生きた社会への視線を積極的に取り入れた分析によって、当時のベルリン社会の姿が生きて浮かび上がってくる。本書の問題意識、主観的な史料をもとにいた分析手法、分析によって明らかにされたベルリンの社会構造、そして刺激的な主張によって、本書は社会史研究の一つの到達点を示すものと言ってしまうまいだろう。本書によって、昨年出版された藤田幸一郎『都市と市民社会』（青木書店）と共に、従来政治史や経済史に比べて見落とされがちであったドイツ都市史が、大きな進歩をと

げたと言えよう。また、著者の文章は流麗かつ遠意であり、ザッハリヒな要約よりも、実際に本書を読んで、著者の意図するところを読みとっていただきたい。

さて、本書で明らかにされたのは、変革を完全に実現できなかった「挫折したブルジョア革命」としての三月革命ではなく、またファシズム体制の先駆者としての「前近代」なドイツ社会でもない。すなわち、一九世紀中葉のドイツ社会とファシズム支配下のドイツ社会とのつながりを牽強附会することはない。本書でまず問題とされたのは、一九世紀中葉のベルリン社会構造の横断面であった。すなわち、当時の人々がどう生きていたか、どう自分の生きていた社会を見ていたのか、どのように考えていたか、どのような活動をしたか、そして諸社会階層がどのようにからみあっていったかが、問われていた。また、一八四八年の三月革命をきっかけとするベルリンの社会構造の変化の分析も、課題であった。そして、こうした分析に基づき、「社会国家」成立という観点から、ドイツ近代史の積極的な再評価が試みられている。本書は、社会史によるドイツ近現代史再解釈のための一つの成功した試みであると言ってよからう。

しかし、本書にかんする疑問もいくつか存在する。

第一点は、「はじめに」において、著者が、ドイツ「三月前期」を、「伝統社会の枠組みが動揺するなかで、さまざまなレベルで社会的流動化が進行しながら、その行方の定まらぬ過渡期」としてとらえていることである。「過渡期」を設定する場合、基準となる、ある程度完成した社会がその前後に存在することをその前提とするであろう。しかし、そうした社会が、はたして実際に

存在するのかどうかについては疑問を感じる。本書でも、「伝統社会」、ないしは「都市民衆の一体性」が維持されている都市社会の存在が暗黙の前提とされ、こうした社会の実態についてはなにも触れられていない。本書で扱われている一九世紀中葉のドイツを、「過渡期」として前後の時期に従属的に位置づけるのではなく、それ自体、不安定な部分を含みながらも、まとまりのある一つの構造体、一つの時代としてとらえるべきではなからうか。

こう考えるのは、本書から受けたインスピレーションによる。本書が明らかにしているのは、「三月前期」のベルリンの社会構造であり、それが三月革命をきっかけにしてどう変化したかであった。そこでは、一見「社会的流動化が進行しながら、その行方の定まらぬ」ような状態にあるベルリンの都市構造の横断面が、みごとにえがきだされていた。本書でとらえられているベルリン社会は、「過渡期」としてのそれではなく、「パウペリスム」時代とも言うべき時代の、それ自体完結した一つの構造体なのである。

第二の疑問は、著者の言う「社会国家」とは、いったいどのようなものであるのか、本書では明確に見えてこないということである。「社会国家」の姿が明らかでないため、首都へ転換したベルリンの構造がはっきりしない。逆に、「三月前期」や三月革命期に比べて、首都転換後のベルリンの構造に十分な分析が加えられていないため、「社会国家」の姿が不鮮明になったとも言えよう。たとえば、首都転換後のベルリン民衆の姿が、本書では十分に語られていない。「三月前期」においてパウペリスムという危機におちいった民衆が三月革命後どのような状況におかれたかは、

ベルリンの首都社会への転換を語る場合重要なテーマであろう。

第三の疑問は、第二の疑問とも関連があるが、第Ⅲ部で説明が試みられたベルリンの首都社会への転換の道筋についてである。

本書では、コレラへの対応と職人の相互扶助組織にかなする議論からこの道筋がたどられている。では、なぜコレラと相互扶助組織なのか。当時ベルリンでは他にも多くのパウペリスムス克服の試みが行われていた。たとえば、一八四四年に設立された労働諸階級福祉中央協会<sup>①</sup>(本書でも扱われている)は、「三月前」期から革命後にかけて、そうした活動を行っている。そうした試みのなかからコレラと相互扶助組織が取り上げられるのは、ベルリンの首都への転換と「社会国家」成立という観点からであった。だが、すでに述べたように本書では革命後のベルリンの社会構造が不鮮明であるために、二つの試みが実際に首都ベルリンと結びついていいのか、また他の道筋のほうが後のベルリン社会で大きく結実したのではないのか、という疑問をぬぐうことができない。

第二の疑問と第三の疑問をまとめて、整理してみると、次のようになる。本書の構想、すなわち三月革命を契機とするベルリンの王都から首都への転換、そして「社会国家」としての近代国家の形成という構図は、本書の叙述からそれをすなおに受け入れるのには、すこし躊躇を覚える。だが、この構想が、非常に興味深

く、かつ刺激的であるのはまちがいない、これからもより発展させるべきものである。この構想をより豊かなものにするためには、三月革命後のベルリンの都市構造にかなする実証的研究の積みかさねが、さらに必要であろう。そして、それは、著者のみならず後続の研究者がこれから取り組むべき課題である。したがって、本書の「エピローグ」は、また同時にドイツ近代史研究にとっての一つの「プロローグ」とも言えよう。

以上本書に関していくつかのコメントを試みてみたが、本書が、ドイツの近現代史、都市史、そして社会史に大きな意味をもつ業績であることは言うまでもないだろう。本書で明らかにされたさまざまな問題は、ドイツのみならず、他のヨーロッパ諸国の近代史を考える際にも重要であり、比較都市社会史の視点を提供するであろう。したがって、本書は、ドイツ近代史研究者のみならず、ヨーロッパ近代史研究者にとっても必読の書と言ってもよからう。最後に、評者の誤読や誤解などについて、著者の御寛容をねがいたい。

① 評者は、この労働諸階級福祉中央協会にかなする論稿を準備中である。